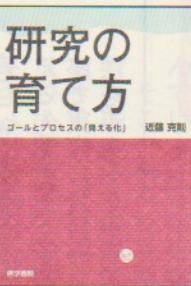




本書は、医療や福祉の現場で働く社会人を中心とした近藤氏の大規模での研究指導の経験から、研究のノウハウと指導のポイントをまとめたものである。

本書の目的は、よい研究とは何かから、研究テーマの育て方、研究助成獲得に向けた計画書作成、学会発表、ライフケークの育て方まで、そのゴールとプロセスを「見える化」することである。

筆者は、「目的が3つあれば結論も3つ」「優れた文獻だけを20～50本選んで引用する」「5～7回は推敲する」と、研究のポイントを数字で示す。同時に、「よい研究は、質の高い臨床や健康長寿社会の実現のために必要で、普遍的な価値がある」として、社会的意義を示す。その上で、「研究と勉強の違い」を強調する。多くの院生が最初に提出するのは、「研究計画



近藤克則 著
2700円 医学書院
03-3817-5666

書ではなく「勉強計画書」だという。それは、既に他の人にによって明確にされていることを勉強する計画にどまっている。これに対して、それまでの学術研究の蓄積のなかで知られていなかったこと、何らかの意味で新しいことを明らかにするための学術研究こそ必要だと筆者はいう。

研究の育て方 ゴールとプロセスの「見える化」

評者は考える。
教師にとって、現場ならでは、そして自分ならではの、仮説を持ち、研究を深めることは、義務であり、喜びといえよう。なかには、教職大学院でさらに研究を深めようとする教師もいるだろう。そのときに大切なことは、「勉強したい」という気持ちを昇華させて、「自らの教育実践に基づく世界で唯一の仮説を検証する」というレベルにシフトさせるのではないか。教師が一人一学説を携えて、交流し、議論し、キャリアアップできる環境を実現したい。

(前聖徳大学教授・西村美東士)